

悲しみを繰りかえさないために

チェルノブイリ被災地では、悲しみや苦しみを抱えながらも、多くの人が前向きに生きています。ベラルーシの国民は、基本的小お祭り好きな明るい人々たちです。私が術後検診のため子どもを家庭訪問するときも、たくさんのごちそうやお酒を用意して、歌ったり踊ったりの大歓迎してくれます。それは農村部でも都心部でも、裕福な家庭でも貧しい家庭でも、どこでも同じでした。

そして、甲状腺がんにかかった子どもたちは、病を乗り越えて成長しています。海外に保養に出かけた経験から「通訳を目指す」と勉強をはじめた子もいるし、「自分の病気をもっと知りたい。同じ病気で苦しむ人の力になりたい」と医療の道に進んだ子もいます。とくに医者を目指す子がいると知ったとき、私は本当にうれしくて、ベラルーシに来てよかったと思いました。

甲状腺がんの手術の後、人によっては合成ホルモン剤を一生飲み続けなければなりません。副作用のない薬なので、結婚も出産もふつうにできます。私が手術した子どもたちの中にも、母親になった女性が何人もいます。生まれてくる小さな命は、希望の光です。これから先、困難なことが待ち受けていたとしても、まっすぐに育ってほしいと願わずにはいられません。

私は本書の中で、厳しかったり深刻な話もずいぶんしてきましたが、すべては、チェルノブイリで5年半を過ごした自分が、実際に見聞きし、感じてきたことです。チェルノブイリで、人々の苦しみや悲しみを見てきたからこそ、福島では同じような思いをさせてはいけないと身に染みて感じています。

これからはチェルノブイリが教訓になり、また反面教師にもなります。これほど広範囲に放射能汚染が広がった経験は、世界でもほかに例がありません。福島は、チェルノブイリに学ぶしかないのです。